

平成30年度滋賀大学健康セミナー
第8回神経精神分析ワークショップ
「意識研究とその臨床への展開」

ご案内

今回で第8回目を迎える本ワークショップは、「意識研究とその臨床への展開」をテーマに開催いたします。

意識の神経基盤についての探求は、無意識の神経基盤についてのそれと並んで、神経精神分析における初期からの重要なテーマでありました。それは旧来の神経科学ではまともな研究テーマとさえ見做されなかったわけですが、90年代から徐々に風向きは変わり、今日例えば最小意識状態 *minimally conscious state* についての活発な研究がもたらす新しい知見には刮目すべきものがあります。ソームスとターンプルは、すでにその「脳と心的世界」*The Brain and the Inner World*(2002)において、ダマシオの「意識と自己」*the feeling of what happens*(1999)を引用しながら、いわば意識体験の基調のトーンにあたる脳幹部の情動活動に対して、さらにそれを「感じる」ことが意識の内容にあたるというモデルを、フロイトの前意識-意識モデルと並べて論じていたわけで、この辺りの目のつけどころの鋭さはさすがと思わせます。

一方、他人に意識があるかどうかという問いに対して、多分あるだろうとしか答えられないと看破したのもフロイトでありました。他人の意識内容を外部から影響を及ぼさずに観測することはできないという認識論的なアポリアがあり、これは例えば二つの脳が同じ対象を知覚していて、二人の個人が同じ絵を眺めていても、二つの内的な意識世界は同じとはいえない(多分似ているだろうが)というアポリアと同じところを巡っていると言えます。洞窟壁画を描いた原始人のように、ほら、走っている牛が見えるだろう？と描いたものを見せて伝わるのがわかれば、相手にも同じような意識体験がある確率が高まるでしょうか？あるいは、同じ絵を見ている2つの脳の活動の同期が高まれば、意識体験も一致している確率が高まるでしょうか？

意識研究のこの先の展開を見通すことは大変困難な仕事に思えますが、おそらく臨床的な経験からのヒントが意外なところから打開策をもたらしてくれそうな予感があります。例年通りの気楽で自由な雰囲気、ニューロサイコアナリシスの多彩な話題について議論出来れば素晴らしいと考えております。多くの皆様のご参加をお待ち申し上げます。

久保田 泰考